学芸員 NEWS LETTER

2024.3　立命館大学　文学部　第36号

城陽市久津川車塚古墳（撮影：木立雅朗）

目次

■ 久津川車塚古墳の発掘調査 …… 2
■ 山梨県立考古博物館での実習を通して学んだこと …… 4
■ 学芸員課程報告 …… 7
■ 兵庫県立考古博物館に勤務して（藤原怜史） …… 8

久津川車塚古墳の発掘調査

文学部 考古学・文化遺産専攻　長　友　朋　子

2023 年 8 月 21 日から 9 月 22 日まで、立命館大学文学部の授業「考古学実習Ⅲ」と考古学・文化遺産専攻の弥生・古墳ゼミ（FB）のゼミ活動として、城陽市に協力し、京都府城陽市所在の久津川車塚古墳の発掘調査をおこないました。久津川車塚古墳は、1979 年に国史跡に指定された、古墳時代中期の南山城地域最大級の前方後円墳です。後円部から見つかった長持形石棺と副葬された銅鏡 7 枚は、重要文化財になっています。古墳時代中期において、大規模な前方後円墳の周囲には、濠とその外側に外堤が築造される場合が多くあります。墳丘周辺のこれまでの発掘調査では、2 重の濠があり幅広い外堤には埴輪のめぐっていることが明らかにされました。一方、墳丘は公有地になっており、史跡として保存されていましたが、墳丘の本格的な調査が開始されたのは 2014 年からです。立命館大学文学部は、城陽市と協定を結び、国史跡の整備に向けた発掘調査に協力してきました。史跡整備に関わる調査が始まってから毎年夏に調査を実施し、今年度でちょうど 10 年になります。この間、久津川車塚古墳の発掘調査に参加した多くの学生が卒業し、その中には埋蔵文化財専門職で活躍する人も少なくありません。

これまでの墳丘調査では、西造り出しや渡り土手のあることがわかりました。また、墳丘の形や規模が明確になりました。2020 年の学芸員ニュースレターでも紹介した通り、西造り出しは東西約 12m、南北約 20m の大規模なものであることが判明しました。造り出し上面には四方を囲むように埴輪列がめぐり、墳丘側の埴輪列には入口が設けられています。造り出し北半では土器が見つかったことから飲食物供献儀礼がおこなわれ、南半には首長に従属する人の埋葬されたことがわかりました。また、後円部と外堤とを結ぶ渡り土手は、造り出しと同じ墳丘より西側に見つかりました。側面には礫が葺かれて美しく装飾されていました。このことから、墳丘を築造するための土や葺石の石を運ぶための作業道として用いられ、墳丘の完成したのちに、葬送儀礼などの通路としても使用されたと想定されます。

後円部墳丘のテラスに並んだ埴輪列（城陽市教委 2023）

墳丘斜面の葺石（城陽市教委 2003）

今年度は、墳丘東側の造り出しの有無の確認を第１の目的として、調査を実施しました。発掘調査前に電磁探査とレーダー探査、サウンディング調査をおこないましたが、造り出しに該当するものは見つかりませんでした。そこで、トレンチを設定して重機で掘削したところ、東側には造り出しがない可能性が極めて高いことがわかりました。そこで、墳丘形状の解明に調査目的を切り替え、トレンチの設定位置を一部変更して発掘調査を実施しました。

第１トレンチは後円部の主軸に直交する方向に設定し、後円部下段テラスと下段斜面を検出しました。第２トレンチでは、昨年度の下段斜面墳端の検出に続き、くびれ付近の後円部下段テラスと下段斜面上端を検出しました。第２トレンチの下段斜面は周濠底まで検出し、斜面に葺石が比較的良好な状態で残存していることがわかりました。後円部の下段テラスと下段斜面が検出されたことにより、墳丘東側の形状と規模を解明することができました。また、周濠底が西側よりも高いことから、水平に整地してから古墳を築造したのではなく、緩やかに傾斜した扇状地の上に古墳の築造されたことが徐々に明らかになりつつあります。来年度の調査で墳丘調査が完了し、その様相が明らかになります。来年度の成果も是非ご期待ください。

墳丘斜面の掘削（撮影：長友朋子）

墳丘斜面の図面作成（撮影：木立雅朗）

発掘調査の現地説明会 2022（撮影：長友朋子）

現地説明会で説明をする 2023（撮影：長友朋子）

2023年度博物館実習（館園実習）レポート

山梨県立考古博物館での実習を通して学んだこと

文学部　考古学・文化遺産専攻　木下夢実

山梨県立考古博物館での実習が終了した。10日間の実習で最も印象に残っていることは、厳しい博物館経営と学芸員さん、職員さんの並々ならぬ努力によって経営が成り立っていることであった。

奇しくも実習が終了した翌日は、国立科学博物館がクラウドファンディングを開始したタイミングであった。国立の博物館でさえ民間の手を借りなければならない窮地に立たされているのである。山梨県立考古博物館も例外ではなかった。実習初日、4名の実習生に向けた副館長の挨拶では、博物館が創立40周年を迎え、老朽化が進む施設設備に応じた資料の展示や保存など普段は見ることのない博物館経営の裏側を知ってほしい、というお話をしていただいた。

実際、この厳しい経営状況が文化財の保存と活用を困難にしていた。実習２日目に行われた博物館資料の保存と活用についての講話では、博物館がそれぞれの事情を抱えていたとしても保存と活用に努めなければならない、という学芸員としての心構えを示してくださった。例えば、財政難からエアコンは博物館の営業時間にしか稼働できず、温湿度計のデータを見ると、(資料保存に大きな影響が出るほどではないが)昼と夜で温湿度変化を繰り返していることや、設備の老朽化により展示室に湿気が入り込んでいるため、ポータブル除湿器で水際対策が行われていることなどが紹介された。一番衝撃的だったのは、特別収蔵庫で綿に包まれて安置されていた鉄剣だ。1970年代に発見されたというその鉄剣は、綿の中でぼろぼろになり、見る影もなく単なる黒い塵の集まりのようになっていた。他の鉄製品は真空パックの中に脱酸素用ＲＰ剤とともにしまわれていたが、この鉄剣は手に取ってしまえば崩れてしまうため保存処理を行うこともできず、綿にくるまれたまま特別収蔵庫に置くしかないのだという。普段見る資料は完形品が多いため、ぼろぼろに壊れたその鉄剣を見ていることが辛かった。学芸員さんも私たちに鉄剣を見せながら、少し暗い表情をしていた。国や県からの支援が少ない中、設備の老朽化や予算の問題などを抱えながら資料を守らなければならないため、博物館経営の現状はとても厳しいものだった。

その中でも山梨県立考古博物館の学芸員さん、職員さんたちは工夫を凝らしながら現状に立ち向かっていた。例えば、展示ケースの下側にライトが設置し、天井からの照明だけでは陰になってしまう土器の下部分が見やすくなる工夫がされていたが、これは学芸員さんと職員さんが共同でソケットや電球を取り寄せ、配線から取

り付けまで全てＤＩＹで取り付けたのだという。ソケットは1000円程度の安い製品で、その分電球はパナソニック製で展示資料に負担が少ない良質なものを取り付けていた。予算を抑えつつも展示をよりよくし、資料を守っていこうとする姿勢に頭が下がる思いだった。

さらに学芸員さんはワークショップ展示のＶＲアプリも作成していた。Steamで公開されている「日本文化財VR」というアプリの製作に参加し、VR体験では博物館所蔵の縄文土器、土偶の３Ｄモデルを VR空間で手に取って近くで見たり、虫眼鏡で観察したり断面図を見たりできる。３Ｄモデルの製作はメタシェイプで行ったという。私もゼミの活動でメタシェイプを使用して３Ｄモデルを作成した経験があり、影となる暗い部分や表と裏をうまく繋げる撮影技術が難しいことを知っていたため、土器内部の暗い部分まで綺麗に３Ｄデータ化され、モデルを回転させても違和感のある部分がないことに驚いた。さらには人面装飾土器の人面部が欠けている部分から内部の空洞まではっきりと見え、細かな注記まで全て確認することができ、あまりの合成技術に衝撃を受けた。このことを学芸員さんに伝えると、練習すればそう難しいことではない、と笑い、重要文化財を撮影する際にはさすがに肝が冷えた、などと３Ｄモデル作成の苦労を語った後、こうした新しい技術を取り入れる重要性に触れ、学生のうちに様々なジャンルを見て楽しんだ方がいい、とおっしゃっていた。

「日本文化財 VR」では「にんぱく」の資料である手裏剣を敵に投げて戦ったり、京都国立博物館に所蔵されている屏風にろうそくを近づけて閲覧したり、現実ではありえない遊び方ができる。さらに、現実の展示よりも詳しく見ることができる奥深さがあった。こうしたアプリ製作をするためには当然考古学の知識だけではなく、幅広く興味を持つことが必要だ。文化財普及のためには、別ジャンルに手を出し、自身のアイディアで展示を面白くする工夫も大切になってくるのだろう。

また、実習５日目に行われた、学芸課の方による講話「文化財梱包の科学」も印象に残っている。講義は文化財の意義や文化財保護法の基本事項だけでなく、山梨県の市町村勤務の学芸員の仕事内容や人手不足の現状、開発業者や行政との折衝など、机上では学び得ない現実について教えてくださった。

お話してくださった問題の根源は全て、埋蔵文化財の価値が認知されていないことにあるのではないかと思った。博物館法の改訂が行われたり、文化庁が文化財を観光資源として活用する提言をしたりなど変革期にある今こそ、埋蔵文化財に対する世間の認識を変える絶好の機会ではないか。文化財としてより高く評価されることで、それが地域の観光資源となり、地域の発展に繋がるため、充実した文化財の維持管理が求められるようになるだろう。実習５日目の講義で埋蔵文化財に対する考え方が変わった。埋蔵文化財は、当然のように存在するものではなく、多くの人たちが守り継いできた大切なものであり、自分自身も守り継いでいかなければならないものなのだ。そして、文化財を守るために声をあげ続けなければならないのだと思った。

山梨県立考古博物館での実習の中で、ワークショップ体験の設営準備・運営や展示解説、収蔵庫の環境管理、

所蔵資料の梱包など大学の授業ではできない体験ができ、さらに講話の中で普段知ることができない博物館経営の裏側を知ることができた。財政難や設備の老朽化などの厳しい現実の問題を抱えながら所蔵資料を守ろうとする学芸員さん職員さんたちの生の声を聴けたことは何物にも代えがたい貴重な体験だった。

博物館実習で、文化財に対する意識を変えることができた。これもひとえに指導をしてくださった山梨県立考古博物館の館長をはじめ、学芸員の皆様や職員の皆様のおかげである。今回学んだことは、今後自身の進路を決める上で大きな指針となるだろう。

お　知　ら　せ

・2024 年 4 月採用予定

茅野市教育委員会
（文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2024 年 3 月修了）

たつの市教育委員会
（文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2024 年 3 月修了）

倉敷市教育委員会
（文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修 2024 年 3 月修了）

・2023 年 4 月から、日本史研究学域 考古学・文化遺産専攻に、岡寺 良 准教授が着任しました。
主に博物館経営論や博物館・学内実習の授業を担当いたします。

本学学芸員課程修了の皆様

文化財関係業務への就職・転職・勤務・その他異動の際には、お手数をおかけしますが、奥付のメールにご一報下さいますよう、よろしくお願いいたします。

学 芸 員 課 程 報 告

2023 年度博物館実習

大学指定実習館一覧（8 館・9 名）				
地域	施設名	実習期間	日数	人数
京都府	宇治市歴史資料館	8/29 ～ 9/2	5 日間	1 名
	亀岡市文化資料館	8/29 ～ 9/1、9/5、9/6	6 日間	2 名
	京都大学総合博物館	9/4 ～ 9/8	5 日間	1 名
	霊山歴史館	9/5 ～ 9/9	5 日間	1 名
大阪府	大阪城天守閣	7/31 ～ 8/4	5 日間	1 名
	大阪歴史博物館	8/28 ～ 9/1	5 日間	1 名
滋賀県	大津市歴史博物館	8/17、8/18、8/22 ～ 8/24	5 日間	1 名
兵庫県	白鶴美術館	8/6、8/13、8/27、9/3、9/10、9/24、10/1、10/8、11/12	9 日間	1 名

地方実習館一覧（12 館・12 名）				
地域	施設名	実習期間	日数	人数
新潟県	新潟県立歴史博物館	9/25 ～ 9/29、10/1 ～ 10/5	10 日間	1 名
富山県	富山県埋蔵文化財センター	7/25 ～ 7/29、7/31、8/1、8/3	8 日間	1 名
山梨県	山梨県立考古博物館	7/27 ～ 7/30、8/1 ～ 8/6	10 日間	1 名
	山梨県立美術館	8/1 ～ 8/5	5 日間	1 名
岐阜県	美濃加茂市民ミュージアム	7/25 ～ 7/29	5 日間	1 名
愛知県	一宮市博物館	8/1 ～ 8/5	5 日間	1 名
滋賀県	長浜市長浜城歴史博物館	8/21 ～ 8/25	5 日間	1 名
京都府	平等院ミュージアム鳳翔館	8/28 ～ 9/1	5 日間	1 名
和歌山県	和歌山市立博物館	8/22 ～ 8/26	5 日間	1 名
広島県	広島県立歴史博物館	8/3 ～ 8/6、8/8、8/9	6 日間	1 名
福岡県	九州国立博物館	8/16 ～ 8/19、8/22、8/23	6 日間	1 名
鹿児島県	鹿児島県歴史・美術センター黎明館	8/16 ～ 8/20、8/22、8/23	7 日間	1 名

立命館大学文学部では学芸員課程を設置し、所定の単位を修得した学生に、学芸員資格を授与しています。
必修科目の「博物館・館園実習」では、学外の諸施設にご協力をお願いし、学生にご指導いただいております。
新型コロナウイルス感染症の影響もある中、御指導たまわりましたことに、心より厚く御礼申し上げます。
今後ともご指導ご協力のほど、何とぞよろしくお願い申し上げます。

兵庫県立考古博物館に勤務して

藤原　怜史（学芸員）

兵庫県は、摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の旧五国を擁し、北は日本海、南は太平洋に面します。このように異なる気候・風土のもと、各地の環境に根ざした多彩な文化が育まれ、特色豊かな地域性が現在に受け継がれています。私が勤務する兵庫県立考古博物館（以下、当館）では、兵庫県下の発掘調査によって出土した遺物を通じて、旧石器時代から近代までの人々の営みについて展示しています。また、弥生時代の集落遺跡である大中（おおなか）遺跡に立地するサイトミュージアムでもあり、竪穴住居が復元された遺跡公園は地域の憩いの場としても親しまれています。

この大中遺跡は、昭和 37（1962）年に 3 人の地元の中学生によって発見された経緯をもちます。発見後まもなく開発によって消滅の危機が迫る中、地域住民が主動となり、未だ体制が不十分であった文化財保護行政と手を取りながら発掘調査がおこなわれてきました。発掘調査では、近畿地方で初となる弥生住居からの鏡の出土があり、竪穴建物の時期的な変化が明らかにされました。こうした成果は、当時まだ謎につつまれていた部分が多かった弥生集落の姿を知る上で重要な遺跡であることが認められ、国指定史跡として保護されるに至りました。

私は平成 29（2017）年に兵庫県教育委員会に埋蔵文化財技師として採用され、3 年間の発掘調査と 1 年間の裏方作業を経験した後、令和 3（2021）年から当館の学芸課で学芸員として業務にあたっています。昨年度には先述の大中遺跡が発見 60 周年を迎えるにあたって記念特別展「弥生集落転生 ―大中遺跡とその時代―」を担当し、近隣の研究者の協力のもと、シンポジウムの実施や研究報告もとりまとめました。みなさんが学芸員の仕事として真っ先に思い浮かべるのは、こうした展覧会の実施や調査研究ではないでしょうか。お客さんや研究者の目に見える…いわゆる“学芸員”らしい仕事の他にも、資料・展示・施設の保守管理、資料の貸出や調査の対応といった、見えない裏の業務も多岐にわたります。当館の資料の大部分は出土遺物とそれらの記録であり、発掘調査によって増え続ける資料を管理し、脆弱なものについては点検や修復をおこないながら、未来へと繋いでゆくことも博物館と学芸員に課された重要な使命の一つです。また、当館の常設展示は参加体験型の展示として、観覧者が触れたり手にとったりできるハンズ・オン展示やジオラマが随所に設けられており、展示をより身近に感じてもらう仕掛けが多い特性上、消耗品の補充やギミックの不具合の確認、展示資料に異常が起きていないかなどをチェックすることも、日々の業務の中で欠かすことができない作業です。

このほか、当館では図録やパネルなどの写真についても学芸員が撮影をしており、前任の方が抜けるタイミングで異動してきたこともあって、現在は私が担当しています。もともと発掘現場での記録写真の撮影は苦手に感じることも多かったのですが、構図やライティングなどの自由度が高い屋内での撮影は性に合っていたようで、楽しみながら試行錯誤を重ねて撮影しています。ちなみに、左下に掲載している空からみた博物館の写真も、ドローンを操縦して自分で撮った写真だったりします。近年急速に進んでいるデジタル化の流れを受け、当館でもこの秋から主要な館蔵資料や館内ジオラマといった一部の写真がホームページからダウンロード・許可手続なしで利用が可能となりました。画像はこれからも追加していく予定ですので、ぜひ一度アクセスしてみてください。

上空から見た兵庫県立考古博物館

テーマ展示室（常設展示）

さて、ここまで学芸員の仕事について自身の体験を交えながら記してきましたが、様々なご縁と偶然の巡り合わせによって支えられている部分もたくさんあります。4 ～ 5 年前の自分に「数年後、学芸員として働いているよ」と伝えることができたとしても、にわかには信じられなかったと思います。もちろん、この業界に憧れて学芸員資格を取得して就職したわけですが、先に少し触れたとおり学芸員としてではなく埋蔵文化財技師として採用された身であり、数年後には他の業務を担当していることでしょう。私のように様々な部署をまわる場合でも、一つの仕事に長く従事できる場合でも、その時々に置かれた環境で自分をより活かしたパフォーマンスを発揮するためには、取り組むべき対象に興味･関心を向け続ける必要があります。そのためには、自分の“得意に引き寄せる力”と“得意を広げていく力”が重要であるように思います。特に、自分の興味・関心を広げていく際には、大学生の時に経験したことや見聞きしたことが、意識を引き寄せるフックになってくれていると感じています。自分のテーマを追究する専門性を磨くのはもちろんですが、学生生活の中で色々なことに「面白そう！」と思える感覚を育てることも忘れないでください。幅広く興味をもって日々を過ごしていると、意外なところに“好き”や“得意”が見つかり、いつかの未来で力になってくれるかもしれません。

2017 年 3 月　立命館大学大学院文学研究科考古学・文化遺産専修博士課程前期課程修了

学芸員 NEWS LETTER

第36号　2024年3月発行
立命館大学　文学部　NEWS LETTER　編集委員会　編集発行
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1　立命館大学文学部事務室
TEL（075）465-8187（直通）
letters@st.ritsumei.ac.jp